■「Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ」転調の考察

例1.1

	(前半)				(後半)			
小節	1	2	3	4	5	6	7	8
【C調】	C Ⅰ	F Ⅳ	Dm Ⅱ	G7 Ⅴ	Am(Em) Ⅵ(Ⅲ) ※	F Ⅳ	Dm-G7 Ⅱ－Ⅴ	C Ⅰ
	T	S	S	D	T 偽終止	S	S-D	T

例1.2

	(前半)				(後半)			
小節	1	2	3	4	5	6	7	8
【C調】	C Ⅰ	F Ⅳ	Dm Ⅱ	G7 Ⅴ	C Ⅰ ※	F Ⅳ	Dm-G7 Ⅱ－Ⅴ	C Ⅰ
	T	S	S	D	T 全終止	S	S-D	T

例1.3

	(前半)				(後半)			
小節	1	2	3	4	5	6	7	8
【C調】 【Am調】	C Ⅰ	F Ⅳ	Dm Ⅱ	G7 Ⅴ	C Ⅰ ※	Dm Ⅳ	Bm7♭5-E7 Ⅱ－Ⅴ	Am Ⅰ
	T	S	S	D	T	S	S-D	T

「Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ」転調について、どのように行ったらいいのか？ 疑問の方もおられるかと思いますので考察です。

例1.1 ある程度、作曲できるようになると、「3コード」だけでなく、「ダイアトニック」コードを使うようになるのが普通ですが、逆に、それに慣れていると、つい**「トニック」**を、**「ⅢやⅥ」**に代理してしまいがちです。

例1.2 「Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ」転調では、**「Ⅰ」**が必要ですから、実は、「3コード」のように、シンプルに**「トニック」**は、**「Ⅰ」**とすればいいわけです。

例1.3 そうしますと、例えば、**「C調」→「Am調」**に転調する場合は、このようにすればよいわけです。

ちなみに、「Ⅱ－Ⅴ－Ⅰ」転調と書きましたが、ポイントは、「Ⅴ－Ⅰ」(終止形)の部分ですので、「終止形」であれば、概念は同じです。 要するに、Ⅴの前はなんでもよいです。

例2.1

		（前半）				（後半）			
	小節	1	2	3	4	5	6	7	8
			※			※	※		
		Ⅰ	Ⅴ－Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ－Ⅴ	Ⅰ－Ⅳ	Ⅱ－Ⅴ	Ⅰ
		T	D-T	S	D	T-D	T-S	S-D	T
						★			
転調・前	【C調】	C	G7-C	Dm	G7	C-G7	C-F	Dm-G7	C

例2.2

		（前半）				（後半）			
	小節	1	2	3	4	5	6	7	8
			※			※	※		
		Ⅰ	Ⅴ－Ⅰ	Ⅱ	Ⅴ	Ⅰ－Ⅴ	Ⅰ－Ⅳ	Ⅱ－Ⅴ	Ⅰ
		T	D-T	S	D	T-D	T-S	S-D	T
						★			
	【C調】	C	G7-C				-F	Dm-G7	C
	【Dm調】			Em	A7	Dm-			
	【Am調】					-E7	Am-		
転調・後	整理	C	G7-C	Em	A7	Dm-E7	Am-F	Dm-G7	C
		【C調】		【Dm調】		【Am調】		【C調】	

別の例です。

※の**「トニック・T」**の部分ですが、ここを**「代理」せず**、**「Ⅰ」**を置きます。
そうすると、多くの**「Ⅴ－Ⅰ」**の**「終止形」**ができます。

例2.1の「C調」のみの曲を、部分転調すると、例えば、例2.2のようにできます。

★。 特に、**「5小節め」**の最初に、**「Ⅰ」**を置くケースはよく使われます。